ショート・ショートまとめ　2

ショート・ショートまとめ　2

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19788364

R-18, モ腐サイコ100, エク霊, ♡喘ぎ, 逆転師弟, モブ霊, ヨシ霊

Twitterで書いていた短いお話のまとめです。ヨシ霊の「例えば君を殺した日」、逆転師弟モブ霊の「光よりの使者　番外編」、ヨシ霊の「ある意味運命」、テル霊の「理解不能解」、エク霊の「ワクワク！エクボの寝盗り大作戦！」を収録しています。♡喘ぎを含みます。倫理が少しアレ。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

ショート・ショートまとめ　２

例えば君を殺した日
【ヨシ霊】

「……なあ、覚えてるか？去年の夏、２人で海に行ったよな」
穏やかな声でヨシフが語る室内には、ガリガリガリと耐圧ガラスを爪で削る音が響く。
「何でかしらねぇけど、貸し出しのビート板でサーフィンできるか、みたいな競争になって」
く、とヨシフは思い出し笑いをする。ダァン、と対化け物ガラスに体当たりする音が響いた。
「その時に、ふと思い出してカルネアデスの板の話になったんだ。なあ、覚えてるか？」
酷い雄叫びが部屋に響く。
「２人で掴まれば２人とも死んじまうが、どちらか一方が手を離せば残った方は助かる。もしカルネアデスの板に俺とセンセが掴まったら、」
ヨシフはガラスの向こうに目をやる。

変わり果てた霊幻がいる、そこへ。

「迷わず手を離す。……先生はそう言っていたな」
もはや霊幻に理性は残っていない。未知の病原体に侵されたその身体は、異常なほど肥大し、醜悪な化け物と成り果てていた。
「なあ先生。化け物になったアンタに、ありとあらゆる治療法を試した。世界中の治癒系超能力者も協力してくれた。でも駄目だったんだ。日毎にアンタは醜く力を増し、凶暴化していく」
ひた、とヨシフはガラスに触れる。
「悪いな、センセ。その病原体が外に出たら困るんだ。……板から手を離してくれ」
ヨシフは監視カメラに合図した。

『ヨシフさん、やっぱり防護服を着た方が──』
「超能力者には感染しないことが分かってる。大丈夫だ」
『……分かりました。対化け物防護壁、開放します』
けたたましい警告のサイレンの音が鳴り、ヨシフと霊幻を隔てるガラス壁が上がっていく。
「──よう、ハニー」
「GRYAAAAAAAA!!」
「……会いたかったぜ」
ブン、と霊幻が振った右腕が床を削る。飛び退いたヨシフは素早く煙草に火を付けた。
「でたらめな強さだな……！」
コレを外に出すわけにはいかない。確かにそうだとヨシフは思う。
「ガ　ア　ア　ア！」
「……っ！」
煙の盾の展開が遅れた。思いっきり蹴られたヨシフは壁まで吹っ飛ぶ。
「がはっ！しまっ……！！」
肺を打ち付けてヨシフの呼吸が一瞬止まる。
その隙に、一飛びにヨシフに迫った化け物がその裂けた口を開けた。
「……っ！」
ヨシフは両腕を突き出した。あー、腕とはおさらばか、と思いながら。
「……？」
が、衝撃は来ない。
「……ゔ」
動きを止めた化け物がうめく。
「よ゛　　じ　　ゔ」
「──！」
反射的に、ヨシフは霊幻に口付けた。
そして目を閉じて。
（──ホワイトノイズ！！）
霊幻の喉に大量の煙を吹き込んで、頭を吹き飛ばした。

「――一瞬で死ねたはずだ。苦しくなかっただろ、センセ」
てん、てん、と人の姿に戻った頭が床を跳ねていく。
同じく人の姿に戻った、グレースーツの身体が、定期的に血を噴き出しながら倒れ込んできたのを、そっとヨシフは抱きしめた。
「――新隆」
ヨシフは穏やかに笑って、霊幻に頬擦りをした。

それからのヨシフは、変わりないようであった。いつもの冷静沈着な、諜報の姿をしていた。
だが彼の心は。
霊幻を殺した時に、一緒に死んでしまっていた。
ある時ふらりと本部に顔を出したヨシフは、仕事の引き継ぎと、辞めることを告げてきた。
不審に思った部下が後を付けると、ヨシフは霊幻の墓に向かっていた。
ヨシフは霊幻の墓の前にどっかりと座って。
ウォッカの瓶を開けて、ラッパ飲みをしながら、煙草を吸い始めた。
（弔いに来たのか）
その痛ましさに部下が顔を歪めた時に。
おもむろにヨシフは立ち上がり、頭からウォッカをかぶった。
（え！？）
そしてヨシフは、自分の身体に火を付けた。
「ヨ、ヨシフさんっ！！」
火は一瞬でヨシフを包み込み、ごうごうと天を焦がす業火になる。
「ヨシフさんー！！」
だが、その中でもヨシフは平気な顔をしてタバコを吸っていて。
「はあ」
ため息をついたヨシフは、一瞬で大きな煙の塊に変わり、火は消えてしまった。
「ヨ、ヨシフさん……？」
煙が晴れたら、そこには何も無かった。
結局ヨシフがどうなったのかは分からない。

だが不思議と、霊幻の墓からはヨシフの煙草の薫香がいつもするので。
霊幻のそばに、ヨシフは居るのだろう。

終わり。

「ハイ、カットー！！」
緊張する撮影現場。そこにホッとした空気が流れた。
「撮影終了です、お疲れ様でしたー！」
「終わった？お疲れ様ー！」
特殊メイクをした霊幻がひょっこり顔を出す。
「……疲れた」
本当に疲れた顔でヨシフが呟いた。
「ま、ま、これも広報ですから！さ、バーベキューの用意をしてますんで、皆さんこちらへ！」
霊幻とヨシフ、そしてヨシフの部下はバーベキューグリルの前にいそいそと集まる。
「うまそー！」
「オイ、火傷すんなよ」
早速焼けた肉を取ろうとした霊幻をヨシフがたしなめる。
「というわけでみなさん、可哀想な霊幻さんとヨシフさんはいないので、ご安心くださいねー！全部撮影です！！」
もぐもぐと肉を頬張りながら、ヨシフの部下が言った。

終

光よりの使者　番外編　師匠の精通
【逆転師弟・モブ霊】

「あ♡あっ♡イ、っくぅ……っ♡」
「……ふ、っ」
四つん這いになった少年の薄い身体に、グロテスクな大人の性器が出入りする。
快感に桃色に染まった少年は、ぴくぴくとそのまだ未成熟な性器を震わせて絶頂の余韻を味わっていた。
「うーん、やっぱり出ないね」
精液を吐き出した事のない霊幻の性器を、茂夫は後ろから手を回してこすった。
「ぁ、ア！ゃっ、触る、な、ってば！おれ、イッたばっか、あ！」
ごしごしと大きなごつごつした手で擦られて、霊幻少年は悲鳴を上げる。
「う、う、あ、〜〜〜っあ！♡♡♡」
ぷしゃあ、と少年は潮を吹いた。
「ぁ……っ♡あ……っ♡」
ガクガクと四つん這いの四肢が震える。
強すぎる快感に、ポタポタと唾液が唇から枕に垂れた。
「こっちじゃないんだよなぁ」
無情にも茂夫は幼い性器を擦り続ける。
「いやだぁっ♡♡♡モブ、やめてぇ……っ♡♡♡」
ばたばたと暴れて逃げようとする身体を茂夫は超能力で押さえつけた。
「もうちょっとの我慢だから、ね、師匠？初めての射精、僕に見せてよ」

ころんと身体に力の入らない霊幻を茂夫は仰向けに転がして、優しげに、そして残酷に微笑む。
まだ潮の余韻が残る霊幻の性器を、容赦なく扱き上げた。
「やだっ♡キツいってばぁっ♡や、あっ！？」
ギクリと霊幻の身体が強張る。
「な、にっ！？な、なにか、くるぅっ♡♡」
霊幻は茂夫の肩につかまり、爪を食い込ませた。
「ゃ、は、ァア……ッ♡♡♡」
びゅう、と。
霊幻少年は初めて射精した。
「なん……え……はえ？？？」
小便を漏らしたかのような瞬間的な強い快感に、霊幻は困惑する。
「わあ、おめでとう師匠！明日はケーキだね！！」
きゃっきゃと喜ぶ茂夫を、キッと睨み付けて。

「セックス３日は無しな」

霊幻は冷たく言い渡し、茂夫は心からの謝罪を叫んだ。

おしまい

ある意味運命
【ヨシ霊】

「遊園地に逃げ込んだぞ！」
やっと確保できるという犯人を、ヨシフの部下がすっ転んで取り逃した。
大慌てで展開したホワイトノイズも潜り抜けられて、人が多い場所に逃げ込まれたヨシフは舌打ちする。

「どこだ、どこに紛れ込んだ……！！」
遊園地側に要請してアトラクションは全て緊急停止させて貰っている。
ごったがえす人混みの中で。
こそこそと、ヨシフからあからさまに逃げている着ぐるみがいた。
「おいっ、お前！」
怪しい。
その紫色のウサギの着ぐるみは声をかけられてびくっと飛び上がった。だっと駆け出そうとしたのを硬化した煙で足止めする。
「ボッ、ボクはただのピザ屋のバイトのアンドロイドだよぉ！？」
「なんだその遊園地でめちゃくちゃ浮く設定は」
ヨシフは呆れながら着ぐるみの頭に手をかける。
「あーっ！！首をもがないで！！」
「人聞きの悪い！」
すぽっ、と取り上げたウサギの頭の中から。
恋人が出てきて、ヨシフは完全にフリーズした。
「……………………何してんだ、霊幻」
「は、恥ずかしいから…もうちょっとだけあっち向いてて？」
いやそう言う問題じゃない。
「お前相談所は？」
「いや今月マジで予約少なくて……俺、顔が中途半端に売れてるから、こんなバイトしか無かったんだよ！」
ただのニィちゃんがもこもこした服を着てるだけの姿は、早速おクソガキ様の標的になっている。
可哀想になったヨシフはそっと頭部を被せてやった。
「ヨシフさん、ホシ確保しました！」
「！よくやった！じゃあ引き上げて、」
「そんなことより、恋人さんたまたま遊園地に居たんですよね！？」
無線から入る浮かれた声にヨシフは嫌な予感がする。
「せっかくなので遊園地デートを楽しんでくださいよ！上の許可は取っておきました！」
ヨシフの部下は優秀である。

そしてやたらヨシフと霊幻推しであった。
「いやでもセンセイ側仕事中だし……」
「……ウチのオーナーも、着ぐるみ着ながらだったら好きにしろ、だってさ……」
「「……」」
そうして着ぐるみとコワモテの２人は、死んだ目をしながら、遊園地を徘徊したそうな……。

（実は楽しかったらしいのは秘密）

終わり

理解不能解
【テル霊】

「好きです霊幻さん。僕と付き合ってください」
ダァン、と机に手をついて輝気は鬼気迫る顔で霊幻に告げる。
「お、おお」
こくりと頷いた霊幻に、輝気は拍子抜けする。
「ホントに分かってます……？今、僕がしたのは、愛の告白ですよ？なんかいつもお世話になってるお礼とかそんなんじゃ無いんですよ？」
「ああ、うん」
頷く霊幻に輝気の頭にハテナが無数に飛ぶ。
本当に分かってるのか、この人、と。
「えっと、じゃあ今日ウチ来るか？」
「……っはあああああああ！？」

「いや来たくないなら別にいいけど」
「健康な成人男性がですよ！？恋人（仮）に部屋に誘われてですよ！？行きたく無いワケないじゃ無いですか！！霊幻さん本当に意味分かってます！？」
「分かってるって」
あくびを噛み殺しながら霊幻は立ち上がる。終業時間だった。
完全にあんぐりと口を開けている茂夫、芹沢、トメ、エクボを尻目に霊幻は締め作業に入る。
「お前らも、もう締めるから準備しろよ」
「あっはい」
言われて相談所メンバーは動き出す。
テルだけがキツネにつままれたような気持ちで突っ立っていた。
（これは……付き合ってる、のか……？）
どこか照れや恥じらいを探して、輝気は霊幻から目が離せない。
「テルくん」
「のわぁぁああっ！」
突然ぬっと目の前に現れた霊幻に輝気は思わず叫んでしまう。
「メシどっかで食べてく？それとも俺んちで食べる？野菜炒めぐらいしかできないけど」
「ふぁっ！？！？！？！？！？」
（デート！？これはデートなのか！？それとも単に後輩にメシを奢ってるだけなのか！？）
混乱したまま、輝気は霊幻さんの家で、と答える。その辺はちゃっかりしていた。
そのまま２人はスーパーに向かった後、薬局に向かう。
（これは、これはどう言うことなのか！？）
表情の全く変わらない霊幻から輝気は目が離せない。少しでも情報が欲しかった。
「テルくんはカラムーチョ派？ワサビーフ派？」
「は！？え、どちらでも……」
「あっそう」
霊幻はお菓子やジュースをカゴに入れていく。
（やっぱりまだ子供扱いされてる）

輝気はムッとする。もう２０歳も越えているのだ。そろそろ男性として見てくれてもいいだろう、と。
「テルくん」
「はい」
ちょっとムクれて返事をして、
「ゴムはM？それともＬ？」
そう訊かれて目ん玉をひん剥いた。
「え、え、え、Ｍで……」
「そう。いやー俺んちストック無いからさぁ……」
からからと笑う霊幻。
「霊幻さんほど、僕の目を惹きつけてやまない存在は無いです……」
「何、突然」
霊幻はいぶかしがりながらローションもカゴに入れる。
２人で霊幻のアパートに向かって。
楽しくご飯を作って食べて、風呂に入って。
タオルを腰に巻いて待っている霊幻に、思わずテルは疑ってしまう。
「霊幻さん、僕の言う事本当に信じてます？」
ただのセフレにしようとしているのでは無いか、と。
「は？だってお前、５年前から俺のこと好きだろ？」
「えっ」
輝気は真っ赤になって固まった。
「俺の事務所に来る時にはプレゼント欠かさないし、モブや芹沢に探り入れるし、さりげなくのつもりだろうけどあからさまにボディータッチしてくるし、そりゃあ俺だって考えたよ。お前の気持ちにどう向き合おうかな、って」
じ、と霊幻は輝気を見つめる。
「俺も好きだな、と思ったんだ。だから告白されたらスムーズに進められるように色々準備してた」
ぽて、とベッドに倒れて。

「初めてだから、優しくしてくれよな」

耻ずかしそうにそう言う霊幻に、輝気はもう一回目をひん剥かされた。

終わり

ワクワク！エクボの寝盗り大作戦！
【もぶお兄さん×霊幻前提のエク霊寝盗り】

クソもぶお兄さんから師匠をねとろう！
エクボとどう見ても両思いだった霊幻、恋愛相談に乗ってくれていたA男にフラっと惹かれてしまう。そのまま呆気に取られる相談所メンバーを尻目に交際スタート。
最初はネコをかぶってたA男、浮気発覚から徐々にクソっぷりを発揮していく。霊幻のアパートに転がり込んで無料のラブホ代わりに使ったり金を無心したり勝手に持って行ったりする（この辺でト〆ちゃんを筆頭に相談所メンバーは怒り心頭）。食欲を無くして痩せていく霊幻を見かねて食事に誘うエクボ。恋愛相談にのってやるもそのあまりの内容に吐き気を催す。「大事にできないなら俺様に寄越せ」とねとりをケツイ。それからしばらくは虎視眈々と機会を狙いながらも食事だけ付き合っていたが、ある日「家に帰るとまたA男が女を連れ込んでるかもしれなくて、帰りたく無い（やってるのをじっと見させられるらしい）」と言う霊幻をラブホに誘うエクボ。何もしねぇからって言って本当に何もしてこないエクボに彼氏からは感じたことのない『誠意』を感じて安心する師匠。ほくそ笑むエクボ。
ラブホにエクボと行ったことがA男にバレて（変に勘がいい）レイプまがいのセックスをされる霊幻。ボロボロの身体で相談所に行って、歩き方がおかしいのに相談所メンバーバチギレ。みんなエクボの味方。優しく師匠を病院に連れて行くエクボ。しばらくエクボと

ラブホ暮らしをして、エクボが勃ってるのに気がついた霊幻が襲い受けでありがとックス。優しく気持ちいいのでつい彼氏と比べてしまう霊幻。
そのあとアパートに戻ると、別れを察知して（勘がいい）これまでと打って変わって優しく振る舞うA男。ラブラブエッチをするものの、（エクボのより小さいし下手だな……）と思ってしまった霊幻はイくこともなくチベスナ顔でセックスは終わる。
いよいよ別れを切り出したら「殺してやる」と言い出して霊幻に殴る蹴るの暴行を加え始めるA男。
携帯で「助け……ッ」って通話するが切られる霊幻。警察が来る前に殺してやるよって言うA男。その瞬間勝手に鍵が開いてバチギレでドアや窓から入ってくるモブくんと芹沢。通話履歴は『モブ』な時点でA男は詰んでる。そしてもちろんバチギレの上級悪霊もゆったり入ってくる。
中略。クレカで限度額までエクボに買い物させられた後に、ボロボロで警察に自首するA男。「ありがとう……」という霊幻に
「あー、いいってことよ」と返していい雰囲気のエクボ。

ふたりは付き合ってめでたしめでたし。

後日。相談所にやってくるA男。
いわく、ずっと自分の意思に反したことをさせられていた。緑色の光がチラチラする、恋人にあんなことをするつもりは無かった。
応対した留守番の耳の欠けた男は、
「それは悪霊のしわざですね。除霊しておきましょう」
とにこやかに笑った。

終わり